

流言蜚語

中谷宇吉郎

青空文庫

八月二十四日の真夜中、当分杜絶とぜつになるという最後の連絡船に乗つて本州へ渡つた。

船は樺太からふとからの引揚民ひきあげみんで一杯であつた。人々は折り重かさなつて冷い甲板上つめたにねていた。それからそれにも増して混んでゐる東北線で一昼夜揉もみ潰つぶされて、やつと東京へ着いた。

東京は全く平穩であつたが、帰りの汽車は復員輸送で往きよりもっとひどく混んでいた。前後二週間近くこの苦しい旅行で得たものは、日本全国流言蜚語うわさの洪水だという感じである。自分で直接見たもの以外は、人の噂うわさなどは全部流言と思つて差支えないという確信を得ただけでも、今度の東京行は大いに有意義だつ

たという気がした。

出発前にちよつと仕事の関係で北海道の田舎の或る村へ寄つたら、東京は大混乱だという噂が拡^{ひろ}がっていて、まるで死地へでも乗り込むように言われた。実際に行つてみると、東京は一番平静な街であつた。帰りは技術院関係の友人が一緒に北海道へ来る用事があつて、技術院の証明を持つて上野^{うえの}へ切符を買いに行つた。その人が駅から歸つて来ての話では、青森で七千人溜^{たま}っているからと言つて、切符を売つてくれなかつたということであつた。私は往復切符をもっていたので、一人で先きに立つて来てみたら、青森では一人の積み残しもなく、全部船に乗れた。

流言蜚語の培養層を、無^む智^ちな百姓女や労働者のような人々の間

だけに求めるのは、大変な間違いである。関東大震災の時にも、
 今度と同じような経験をしたことがある。あの時にも不逞鮮人
 事件という不幸な流言があつた。上野で焼け出された私たちの一
 家は、本郷ほんごうの友人の家へ逃げた。大火が漸くようやおさまっても流言
 は絶えない。三日目かの朝、駒込こまごめの肴町さかなまちの坂上へ出て見る
 と、道路は不安気げな顔付をした人で一杯である。その間を警視庁
 の騎馬巡査が一人、人々を左右に散らしながら、遠くの坂下から
 馳かけ上つて来た。そして坂上でちよつと馬を止めて「唯ただいまうごくこ今六
うがわ郷川を挟んで彼我交戦中であるが、何時いつあの線が破れるかもし
 れないから、皆さんその準備を願います」と大声で怒鳴つてまた
 馳けて行つた。もう二十年以上も前のことであるが、あの時の状

景は今でもありありと思ひ浮うかべることが出来る。勿もちろん論全く根も葉もない流言であつた。

そんな馬鹿なはずはないと思われることは、どんな確からしい筋からの話でも、流言蜚語と思つて先ず間違ひはない。そういう場合に「そんな馬鹿なことがあるものか」と言い切る人がないことが、一番情ないことなのである。

八月十六日の夜中に、けたたましい電話の音で起おこされた。「一刻を争う重大問題だそうですから、直ぐ電話にかかつて下さい」と家の者が蒼あおい顔おたるをしている。聞いてみると、なるほど重大問題である。小樽れんへソ聯兵が二万上陸したから、戦時研究関係の重要書類を直ぐ焼却しろという話なのである。もうみんな非常呼集で

集っているという。前日からの疲れでぐっすり寝込んだ寐入端ねいりばなを起されたので、大分不機嫌である。大体あの小樽の埠頭設備ふとうで、二万の武装兵力が上陸するのに何日かかるか、とても一日や二日で出来る話ではない。夕方まで何事もなかったのに、三時間や四時間後にもう二万の兵隊が出現しているとしたら、それはアラビヤンナイトの兵隊である。御免を蒙ごめんこうむってまた床に潜り込んでいたら、一時間ばかりしてまた電話が来て「今のはデマだったそうだから」という話で梟けりがついた。

東京でも同じような話が沢山あったそうである。終戦から二、三日目に、某区で「今夜アメリカの兵隊が来るから、米国の国旗を用意し、御馳走ごちそうを作って待っているように」という布告を回覧

板で廻した所があつた。某研究所長の話であるが、その研究所員の若い夫人が、回覧板を見て慌あわてて、研究所の夫君のところへ馳つけたそうである。所長がそれは嘘うそだ、そんな馬鹿な話があるはずがない、一体憲兵隊へ聞き合せたかときくと、まだ聞いていませんと言う。電話をかけてきいてみると、勿論嘘である。その所長は研究員の人に「君たちは百僚有司のその有司の一人じゃないか、こういう場合には、そんな馬鹿な話があるはずがないと言下に言い切れるようにならなくてはいけない」と訓おしえられたそうである。

「そんなことがあるはずがない」と言い切る人があれば、流言蜚語は決して蔓まんえん延しない。しかしこの「はずがない」と立派に言

い切るには、自分の考えというものを持つ必要がある。そしてそのことは実はかなり困難なことなのである。特にこの数年来のようには、もはや議論の時期ではない唯実行あるのみというような風潮の中では、その精神は培われない。

新日本の科学の建設には、まず流言蜚語の洪水を防ぎ止める必要がある。もつともそれが出来た時は、新日本の科学は半ば以上出来上った時であるかもしれない。

（昭和二十年十月八日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「春艸雜記」生活社

1947（昭和22）年

初出：「読売報知」

1945（昭和20）年10月8日

※表題は底本では、「流言―蜚語《ひび》」となっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

流言蜚語

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>